

■ 特別公開講演会より

自我を超えて

地球一体化に向けての新しい価値観

シタカント・マハパトラ

柳沼正広 訳

本日の講演では、私たちの時代の自己中心的なナルシズムの人格の輪郭を描き出し、それを導き出した諸要素を吟味し、またそれが、今日ますます現実のものとなってきた「地球村」、あるいは地球の一体化とは決して相容れないものであることを示したいと思っています。

そしてそのことは、この自己破壊的な人格から抜け出す新しい道筋を探ることにつながるでしょう。それは現代世界において避けることのできない旅であり、私は、本講演を、個々の人間を救い出し、かつて

の共同体的生命の織物の中へと融合させるのは、新しい価値観のみであると訴えて締めくくりたいと思います。

一 地球一体化に向けての

新しい価値観の探求

今日の世界をマーシャル・マクルーハンの言う「地球村」と呼ぶこともできますが、あるいは地球一体化の新しい表現を用いるなら、世界の大部分は、じつに私たちの家の客間の中にあるとも言えるでしょう。オール

ダス・ハクスリーは、国民の頭上を飛行機が飛び交うような国民国家を腹の底から笑いとばしました。しかし、新しい千年紀の今日、インターネットによって、市民・シチズン、あるいはネチズン(n netizen)——あるいはネットの奴隷——と世界は配線のワイヤーによって、あまりにもきつく結びつけられています。アメリカのオクラホマ州での連邦ビル爆破事件や、インドのゲジャラート州、そして神戸における大地震は、私たちの家の客間を震撼させています。

環境、経済、文化は一体となりつつあります。リオでの地球サミットやWTO国際貿易機構は、私たちの「創造的多様性」を発見し、発展の過程に文化を取り込むことが欠かせないことを認識することによって生まれました。文化の発展は、私も参加させて頂いていた文化と発展の世界委員会のテーマでもあります。

人間は、神が死んでいるかもしれないことに気づき始めましたが、ヴァイツラフ・ハヴェルが言うように、人間の病は大変に重いのです。そして、その私たちの病の根を、誰よりもはつきりと見つめたのは、教主釈

くものであります。

会長の著作『私の釈尊観』には、仏教とSGIが新しい千年紀において果たすべき役割が示されております。私は、この方向性において会長がなされてこられたことに、最大限の敬意を抱く者であります。

二 私たちの時代のナルシズム的人格

それでは、まず、今日の人間を苦しめているものを見てゆくことにしましょう。それは、自己中心的・ナルシズムの人間です。

ナルシズムは、私たちの時代の人間状況を、簡潔に強く、また理想的に表現するメタファー(隠喩)であります。数多くの社会的・文化的要因が、この心の状態をつくり出していますが、それは、他者の欠如、そして他者と十分な意味を持つ結びつきを築くことができないことから、現れてきています。それは強欲な人格でもなければ、権威主義的な人格でもありません。強欲な人格は、十九世紀のヨーロッパの政治経済の特徴であるブルジョワ資本主義の初期段階の指標であり

尊に他なりません。王子であつた彼は、父である王に對して、彼自身の富を貧しい人々に分配するように頼んだのも、環境を守るように頼んだのもありません。というのも、彼は、より深い次元で、人間存在の状態を見ていたからなのです。彼は家を捨てた現実逃避の人間ではありません。彼が出家したのは、一時しのぎの慰めでは到底満足できないほど、人間を愛していたからなのであります。

仏教にはさまざまな形態がありますが、特に日蓮の教えに基づく創価学会は、より具体的に、より現実社会に適應した形で、人類の幸福と平和の実現のために懸命に戦い続けてこられました。

池田大作氏は、創価学会インタナショナル(SGI)の会長として、世界の知性と素晴らしい出会いを重ね、アーノルド・ジョセフ・トインビー、ライナス・ポーリング、ヨハン・ガルトウング、ブライアン・ウィルソンなどの偉大な知性との対話を何年にもわたって続けてこられました。この行動は、地球一体化による平和と人類の幸福のための、新しい価値探求の先頭をゆ

ました。今日では、もはや強欲な精神も、将来に対する保証として何かを獲得したいと思っていない。それは単に、未来そのものの存在が疑われているという理由からです。熱烈に求められるものは、望みや要求をただ即時的・刹那的に充足することにかわつていきます。人生は、決して止まることのない落ち着かないものとして、永久に満たされない欲求の洪水のように生きることを求められています。そこには、休息というものがありません。そして現代の情報技術と巨大広告産業は、そのことを着実に押し進めています。

デカルトはひっくり返されてしまいました。もはや、「コギト・エルゴ・スム」、「我思うゆえに我あり」ではなく、いまや、「私たちが考える、ゆえにあなたたちがいる」となっています。実際には、考える必要さえなくなつてしまったのです。億万ドル企業にいる研究者たちは、損得の計算まで、私たちのかわりにすべて行つてしまいます。彼らは、私たちがどの石鹸やシャンプーを使うべきか、何を食べるべきか、だけではなく、私たちがどのように他者との関係を調整し、どのよう

に自分の人生を切り開いていくかについてまで、決めてしまおうとしているのです。

第二にこのナルシズムは、権威主義的な人格でもありません。権威主義的人格は、力を形成するあらゆる知識やあらゆる決定を自分のほしきままにする、高度にエゴイステイックな自己と堅く結びついています。また、少なくとも自分の意志を他者に押し付けるもので、罪責の念による強迫観念を引き起こすことがあります。現代のナルシストは、独裁的な政治経済の人間ではありません。彼は困惑し、不安に押しつぶされそうな心理の人間なのです。おそらくこれは、ブルジョワ個人主義の最後の所産でしょう。このような人格は、他者に対して自分の確信を押し付けることを思いつくことさえできません。実際彼は、確かなものをほとんどもっていないのです。彼自身が、自分の人生の意味に確信がもてないため、あらゆる人を競争相手とみなしてしまうのです。彼は、現実感を喪失し、自分の人生をも失ってしまったのです。

ナルシズムの人格は、意味を渴望しないだけでは

あらがうことのできない美しさや太陽いつばいの希望と大地は結びついて、広大な空、海、川、森、鳥や動物たちもみなつながり合っていました。

また、人間の世界を築いた祖先たちも、人々が彼らに感謝の念をもつて思い起こすかぎり、人間界の繁栄に関わっていました。そして最後に、目に見えない神々が、雲の向こうにはいたのです。人は、この巨大なサークルに属する一部だったのです。

その世界観は全体的なものでした。そのような調和的宇宙観の中では、個々の人間は孤独を感じることはありません。正当な儀式的供養と崇拜によって、真に人は神々や祖先の祝福を求めることができました。悪意の神々もいましたが、大多数は、善意の神々でした。そして生命の均衡は、祖先に祈りを捧げることだけでなく、人間と他の人間たち、自然、神々、社会のそれぞれが正しい位置にあるという世界観への統合的アプローチによって保たれていたのです。

科学技術文明の誕生は、かつて幾世紀にも渡って続いたこの全体的な世界観の崩壊をもたらしました。す

ありません。瞬間を超え、物質を超え、彼自身を超えるような、どのような意味の可能性をも否定してしまいます。これは魂の恐るべき貧困化であり、そこから戻ることはできません。トム・ウルフはこのナルシズムを「第三の目覚め」と呼びました。それは、その瞬間と自分自身のためにしか生きることがない、自己中心的な自我の恐ろしい沈黙に気づくことであります。つまり、ナルシズムは、私たちの時代の人間状況を最も雄弁に語るメタファーとなったのです。それは二つの顔をもっており、一つは、不安と絶望にさいなまれる全くの自己中心主義であり、もう一つは、他者とのあらゆる結びつき、あらゆるつながりの否定なのであります。

三 全体性崩壊の長い歴史

かつてはそれぞれがお互い親密に、有機的につながっていました。人間界においては、個々の人間も社会の網を形成する家族や共同体などのさまざまな集団の中で他者とながっていました。自然界においては、

すべての原始的な文化に共通のその世界観の中では、孤立した、わがままな、孤独な個人は例外であって、通例ではありませんでした。結局、現代の科学は、現実のある側面だけを、たとえば物理的、生物学的、心理学的側面しか探求してきませんでした。社会文化的、倫理的、精神的といった他の側面も、探求されてはきましたが限られた成果しか収められていません。私たちには、まだ心の中の新たな最前線については十分な知識がありません。そこでは、超心理学でさえも、広大な王国の入り口でしかありません。

学問がはじめにもつていた慢心は、不十分さに対する自覚にとつかわられようとしています。私たちの世代の最も偉大な科学者たちは、自己自身と私たちの周りの現実に対する科学的な見方の不十分さを明らかにするようになってきました。私たちは確かに祖先たちよりも、宇宙についてより多くを知っているかもしれませんが、しかしこのような知識には、謙虚さや全体観、利他の精神などとともに、私たちの知覚に影響を与える何かが欠落しているように思われます。

宇宙は単なる全体ではなく、私たち自身の魂の全体であり、神々や精霊たち、祖先たちの全体なのです。つまり科学の恩恵に支えられた現代文明は、かつて保たれていた全体的な世界観を回復するための、有効な選択肢を提供することができないのです。間違いなく、科学は、私たちの知識の中にある隙間、たとえば不確定性の原理、ブラックホール、存在の境界線などについて語り始めました。しかしながら、人間を自己中心的な自我から、現実との融合というより高いレベルへと引き上げる、統合的世界観の回復は未だ不可能のままです。ステファン・ホーキング、ロジャー・ペンローズ、ジェイ・グールド、またその他の著名な科学者たちは、学問と神秘、あるいは科学技術と神話の境界を見つめています。

私たちは、人間を自然から疎外する、ゆつくりとした、しかし、止めることのできない変化に気づいています。自然への親近感、自然を所有したり搾取したりする方法によってかわられてしまいました。世代間の平等の問題さえ、忘れられています。かけがえのない地球の恵みも、結局は、後世のすべての人々のものであり、一つの世代のためだけのものではありません。その結果は、環境の不均衡、酸性雨、温室効果、沈黙の春の訴えなど、リオでの地球サミットを開かせたすべての問題です。

皆さんはガイア説というものを聞いたことがあるでしょう。その説によれば、私たちはより大きな全体の一部であり、私たちの運命は不可避的・統合的にこの生きている惑星ガイアに結びつけられていると言えます。ガイアとは、古代ギリシャの女神の名前で、あらゆる文化・宗教における母なる大地の原型であります。実際、この、科学技術に支えられ、省みることも立ち止まることもない地球資源の搾取は、生命そのものの存続をも脅かすようになりました。私たちはもはや、地球を取り戻す仕事を、イエスやマホメット、その他のいかなる神にも任せておくことはできません。著名な科学者であるコリン・ラッセルは、「地球、人間性、神」と題した一連のテンブルトン・レクチャーの中で、正しくも次のように強調しています。

人間が千年紀の手段である。もはや自分自身の十字架を背負うことを拒否することはできない。科学技術

は、蒸気機関、活版印刷、コンピューターと情報革命など、そのすべての段階において、到来する未来の衝撃を高めるにすぎない。そして千年紀が終わるとき、人間は自然を受け入れなければならない、と。

しかし、また一人の指導的科学家は、自然征服の果てしない慢心がもたらす重大な結果について警告しています。人間の思い上がりは、人類文明に天罰を招くかもしれません。カール・セーガンは自叙伝『ビロonz・アンド・ビロonz』の中で、人間が、十分に自覚しないまま、人間自身にとって危険な存在となってきた様子を語っています。技術革命は、多くの人が自分の住処である地球にいながら、自分の家にいると感じられなくなるほどまでに、地球を変えてしまいました。さらにセーガンは、忠告しています。「恐竜は絶滅するまでに、地球に十八億年ものあいだ存在していたが、人類は、まだ百万年しか存在していない」と。

四 とらえきることができない地球と人間の価値観

今日では、人生には、喜びも愛もないように思われ、したがって情熱がないように思われます。自分自身の人生に対する情熱も、社会の他の人たちに対する情熱も、親近感や一体感に対する情熱もありません。また、神々や自然界、死んだ祖先たちに対する情熱も、川や木、鳥や雲や動物に対する情熱も、死やその次の生に対する情熱もありません。つまり、愛すること、生きること、死ぬことの中に、情熱がないのです。人生が、祝福や安らぎ、歓喜であるかわりに、どんよりと、色もなく、型にはまったものとなり、重荷となつて退屈になるのも当然です。愛も冷たく、余りにも物理的、機械的になり、もはや虹の色彩や人間の心、体、魂、本能、理性といった、その全存在を明らかにすることはありません。

今日では、神々は存在もしないし、重要なものと思われていません。人間の人生は、再びホッブスが考

えていたような卑劣で、残酷で、そしてはかないものになりつつあります。情熱がないゆえに、意味も重要性もありません。意味や重要性というものは、個人の知性による発見にかかわることであって、聖典や教祖から与えられるものではありません。そして、人生に対する情熱的な愛がなかったり、あるいは人生を、組織的、機能的な図式やロボットの演技、暗闇の中の囁きのようにしか見えないなら、その重要性の発見は、不可能なのです。

世界に対する情熱も失われたとき、ポーランドの詩人、チエズロー・ミウオシユは、とらえきることのできない地球と呼びました。

この地球のものたちは理解することができない
水の魅力や果実の魅力に

把握できないほどの無数の群れが集まってくる
木の皮の皺の中でも、望遠鏡に映るなかでも

婚礼は果てしなく続き、

みな目を輝かせ、甘美なダンスを踊っている

空気、海、大地そして地中の洞窟の中の
短い一瞬のうちに、死は存在しない
そして時間も、
地底に投げられた紡ぎ糸のように
ほぐれたりほしくない

また、パブロ・ネルーダは地球を称えて、次のように問い掛けています。

ああ地球よ、待つてほしい
あなたの澄み切った贈り物を私に取り戻してほしい
それがたった一つの石だろうと
黒ずんだ石だろうと、川が運ぶきれいな石だろうと
うと
かまわないから

この惑星上の生命の中には、あらがうことのできない魔法が、常に存在しています。日々の決まりきった

仕事の背後にも、魔法があり、奇跡が繰り返され、永遠の存在の神秘が織り成されているのです。私たちはおそらく、死さえもがその荘厳さと感動的なイメージを失うまでに人間性を奪われています。アイルランドの詩人シェーマス・ヒーニーは、かつて次のように感じていました。問題は、死の後に生があるかどうかではない。本当の問題は、死の前に生があるかどうかである、と。

世界に対する人間の情熱は、死の瞬間に最も強くなり、人生のすべてと、その人間の存在を構成してきたイメージが、その最期の瞬間に、心のスクリーンに流れると言われています。死もまた、多くの場合、神聖なものでした。魂はふたたび新たな生を始め、その人が大切にし、愛したのもまた、まさに始まるうとしていた新たな旅に、その人と共にゆくのだと考えられていました。また死を見届けた他の人々にとっても、その死は、人間が直面することのできる最も感動的な出来事の一つだったのです。カミュの『ペスト』の主人公ベルナル・リュウ医師と神父との古典的対

話を思い出します。神父は、はじめ『ペスト』を、オランの町の人々の不信心と異教徒に対する天罰だと考えていましたが、無実の子供の死に直面します。その子供が苦しみ、彼が耐えがたい苦悩にもだえるその瞬間は永遠でした。そして、彼は、一つ一つの死によって、自分たちが減ってゆくのだと言われる意味を実感することができました。

今日では、死は、単なる統計の問題になってしまい、車の爆破事件や、無関係な通行人に浴びせられる銃弾、空から海へと墜落していく飛行機いっばいに乗った人たちが、キガリで惨殺された何百万という人々、サラエヴォで狙撃兵に撃たれた人々など、その数の問題となってしまうています。私たちは数のゲームに慣れてしまったのです。人類の歴史において、これほど生の意味が薄れ、死の意味が失われてしまったことはありません。人間は、虫けらのように、いや、命のない物体へと後退しつつあります。この非人間性に対する反感を沸かせ、すべての個々の人間の血を燃えたぎらせ、そして、生命の神聖さを守る究極の防壁を提供してく

れる情熱はどこにあるのでしょうか。生命は神聖です。不思議です。奇跡です。なぜなら、生命ははかなく、一瞬のときのように、消え去ってしまふからです。生に対するある意味での世俗的な愛という情熱と死の自覚だけが、時代の非人間化から、私たちを救い出すことができるのです。

今日でも奇跡は起こっています。マンゴーの樹は花を咲かせ、雲は地球に寄り添い、恵みの雨を降らせます。太陽も輝き、月も冴え渡っています。子供たちは、路上でも、戦場でも生まれ、彼らの喜びにあふれた泣き声は、神がまだ、この地球に飽きてしまったわけではないことを告げています。

いくつもの国際フォーラムが、普遍的な人権の尊重に基づく新しい世界秩序の必要性を繰り返し説いています。そのような人権の尊重は、アフリカで人道的な活動をした医師、アルベルト・シュヴァイツァーの次のような言葉に集約されるでしょう。「私は、生きることを望む他の存在たちのただ中で生きたいと願う存在である」。しかし、このような普遍的な人権の尊重に対

する喫緊の要請は、価値観の新たな復活によってのみ、もたらされなければなりません。それは、どの個人も、決して孤独に自分のためだけに存在しているのではなく、それぞれが大地と宇宙に堅く結びつけられているという、今忘れられている自覚を呼び覚ますことです。私たちは、身近な社会の網の一部分であるだけでなく、もっと大きな、もっと高度な次元において、尊ばれるべき法則をもつ神秘的な宇宙に統合される一部なのです。

それゆえ、必要なのは、宇宙全体との私たちのより深い結びつきを自覚し、完全性を取り戻すことなのです。先ほども触れましたが、科学は今、無限性の境界や宇宙の隙間などという形で、不確実性について語り始めています。それはもはやかつての確実性を表すことはありません。ある意味で、科学は、人間の外面的な力の限界に到達し、人間そのものへ立ち返り、人間の完全性とその宇宙との融合的なつながりを探求し始めたのです。

今申し上げたような、自覚というものは、あらゆる

宗教が基本的に唱えるところのものです。人間は自身を世界との関係の中で理解し、宇宙の真の意味を理解しなければならぬという認識です。この認識は、今必要とされている自己超越の力を取り戻してくれるのです。

新しい世界のための本当の価値とは、生命という奇跡に対する尊敬の念から生み出されます。宇宙、自然、そしてこの惑星の上に共にあることの奇跡です。私たちが世界と、この世界における私たちの位置をそのように捉えるときのみ、宇宙の秩序を敬い、その中に参加し、また、仲間である人間だけでなく、すべての生ける物とその権利を尊重することができるようになるのです。奇跡を信じることは迷信とは違います。奇跡は神話の世界にのみあるものではありません、今日でも、私たちが目を開き、耳を傾けさえすれば、私たちの目の前で見ることもできるのです。

十五世紀のヨーロッパのおとぎ話に、修道院を訪れる疑い深い若者の話があります。その修道院では、修道士たちが、祈りと瞑想と聖書の拝読に生涯を捧げて

いました。若者は、修道院長に簡単な質問をします。「あなた方は、一生涯この場所から動かずについて、退屈しないのですか」。修道院長は、問い返します。「若者よ、あの木に止まっている黄金の羽をまとった小鳥が見えますか」。若者はその鳥を見るとすっかり魅了されてしまいます。その鳥は枝から枝へ、木から木へと飛び続け、若者はその鳥を追いつめて、見続けてゆきました。

永い時間の後、若者は修道院に戻ってくると、修道院長は、すでにいませんでした。彼の後を継いだ人物が、若者に語りかけます。「君は、黄金の鳥を見るだけで四十年も費やしてしまったね」と。若者は、鏡を見せてもらうまでその意味を理解できませんでした。彼は、愕然としながら、自分の髪がすっかり白くなり、歯がいくつか抜けてしまっていることを知ったのでした。新しい修道院長は言いました。「君よ、一羽の鳥を見るだけで、四十年もの時を費やし、またそのことに気づくことさえもないのなら、人間がこの世界や自分自身に飽きてしまうなどということをどれだけ理解でき

るだろうか」。

また、私自身の国の神話からも例を引くことができます。神であるヴィシユヌは、賢者ナラーダの信仰を試そうとしました。ヴィシユヌはのどが渴いていたので、ナラーダに一杯の水をもつてくるように求めました。ナラーダは、水を求めてゆき、美しい川に遭遇しました。そこでは、美しい乙女が水を汲んでいました。ナラーダは、恋に落ち、その乙女と結婚して家庭をつくり子供ももつようになりました。そこに大きな洪水が起こり、渦巻く激流がナラーダの妻と子供たちを奪い去ってしまいました。ナラーダは泣き始めましたが、そのとき彼は、菩提樹から響いてくるヴィシユヌの声を聞いたのです。「ナラーダよ、私は、まだ待っているのだ、あなたが水を運んできてくれるのを」。

以上の二つの例は、それが奇跡を見えるという問題であることを示すために引いたのです。今日においても、子供たちが等しく神々のように微笑むのは奇跡ではないのでしょうか。花々が、誰もまねできないような色をもっていることや、太陽が昇っては沈み、また再び

昇ることは、奇跡ではないのでしょうか。

よりよき世界は、すべては神に基づいていると祈りながら、すべては人間次第であると行動しなければならぬという価値観の上にのみ築くことができるのです。

私たちには、力が、それ以上に謙虚さが必要です。

今日、世界は二つに分かれようとしています。一つは、より多くの商品やサービスを生み出したり、需要を刺激してそれらを満たしたりする、進歩にとって効率のよいマシンとなることを望むグループ、もう一つは、もっと幸せな、生きてゆくのにより良き所となることを求めるグループです。私たちは、自分がどちらに属するか、選択を迫られているのです。

五 許し・他の自己への旅

宇宙的な意識、つまり自身が宇宙と一体であるという状態へといたるための長い旅において、求められる最も重要なことは、許す力にあります。罪深い私たちは、許すことを学ばない限り、救われることはないで

しょう。神だけが取り除くことができる原罪の黒いシミは、私たちでは取り除くことはできません。過つのが人間であり、許すのが神であると、正しくも言われているとおりです。ミラン・クンデラは次のように言っています。「罪からその妥当性を奪うこと、帳消しにすること、時の中から消し去ること、言い換えると、無に帰してしまうことは、神秘的で超自然的なわざであります。奇跡を行うことができる神だけが、罪を洗い去り、無に帰して、許すことができるのです。そして人間は、神の許しの中に自身を見出す分だけ、人間を許すことができるのです」と。

許す力は、新約聖書のヨハネによる福音書に美しく表現されています。長くなりますが、私は、ここにそれを引用せざるにはいられません。「そこへ立法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れてきて、人々の前に立たせ、イエスに言いました。『先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。さて、あなたはどうかお考えになり

ますか』。しかし、イエスは、答えませんでした。それでも彼らがイエスを困らせようとして、同じ質問を繰り返すと、イエスは彼らに向かって言いました。『あなたたちの中で罪を犯したことの無い人が、まず、この女に石を投げなさい』。これを聞いた人たちは、良心の呵責に耐え切れず、一人また一人と立ち去り、イエスとその女性だけが残りました。イエスは彼女に言いました。『さあ、あの迫害者たちはどこにいるのか。誰もお前を咎めなかったのか』。彼女が『主よ、いいえ、だれも』と答えるとイエスは言いました。『私もお前を咎めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない』と」。

許す力のほかに、愛する力、同情し共感する力も高めなければなりません。自己中心主義から、あらゆる宗教の本質である宇宙的自我へと旅するには、私たちが全世界の悲しみを直に感じる必要があります。ときにこれは、人間や社会からの明らかな離脱を引き起こすことさえあるでしょう。王子であったゴータマ・シッダルタが、快適で贅沢な宮廷の生活や美しい愛すべ

き妻を捨てたとき、決して、世界から逃げ出したのではありません。実際、彼は私たちみなが大切にする世界を捨てました。しかし、それは人間とその幸福をあまりにも愛していたからであり、煩惱という人間の悲しみの原因をあまりにも深く見ていたからなのです。このような至高の愛こそが、彼に人生と繁栄の幻影を拒絶させたのです。真の愛は、人を真の叛逆児にします。ブッダは、人類を最も愛する者でありながら、広くゆきわたっていた世俗的価値に「ノー」と言った最大の叛逆児でもあったのです。

有限の、自己中心の窓のない自我の殻から、徐々に高い意識へと昇る旅の必要性は、この事柄に関する深遠な言葉のいくつかを見ることによって明らかになります。ティヤール・ド・シャルダンは大変美しく、またなぞめいた調子で言っています。「より豊かになるには、より十分に結びつかなければなりません」。言い換えるなら、あなたの力は、あなたの自覚や関心の境界を広げ、その自覚を締め付けたり、窒息させたりしてナルシズム的な衝動へと陥らないようにする中にある

自覚の新しい夜明けと宇宙全体における利他の行動への願いです。宇宙的自我は、単に宇宙を自覚することではありません。宇宙を呼び起こし、その中に入り込むことです。ゴッホは、最期の発狂と自死の直前に、素晴らしい作品を描いています。そこには、閉ざされた空間で、人々が輪をつくって回っています。人々が月明かりの夜へと歩き出そうとさえ思えば、開くことができる扉があります。これは自己中心的な自我のイメージです。悲劇は、扉を開くことの拒否であり、その機会を忘れ、可能性を窒息させていることです。より高い自己への旅は、より広い王国である調和的宇宙へと意識の扉を開くことを呼びかけています。

かつてサルトルは言いました、「地獄とは他者である」。また、こうも言っています、「地獄とは自己である」と。それは西洋の実存主義の最終結果でした。サルトルの作品の登場人物は、木の根つこのこぶを見て、自分がそれに飲み込まれるような気持ちになります。これは自己がただ物体だけに囲まれ、その物体だけが本当の現実となってしまうときに起こるのです。こ

のです。孔子は、幸福な生活を導く指針は何かと問われて、「それは利他の精神である」(仁)と答えました。本質において利他の精神とは何か。それは自己本位から、他者の善へと向かい、全世界と喜びや悲しみを分かち合うことです。他者がこの地球上における自己の存在証明となるのです。このような本物の利他の精神にあふれた自己は、自身の過ちや不十分さを深く自覚するときのみ、可能となります。聖アウグスティヌスは語りかけるように言いました。「わたしは過つ、ゆえに存在するのだ」と。

どの人の内面にも、彼の存在のレヴェルに応じて、さまざまなレヴェルの自覚があります。ヴィドヤーすなわち智慧というものは、本やマニュアルから集められた情報のことではありません。私のところの文化では、それを自身を開放する知識あるいは智慧と定義しています。狭く限られた自我からの解放、自身の低く卑しい性質からの解放、闇からの解放、自己本位な欲望の牢獄からの解放です。

このことを実現させる根本は、再生への願いです。

これは自己の境界の拡大ではなく制限であり、窒息です。

私たちの聖典では、私たちがすべて知っていることを再び知らしめるあの智慧について語っています。宇宙的な自覚は、そのような智慧から、魂の闇夜を破る夜明けのように、現れてくるのです。智慧とは、暗闇では見えなかったものを光をもって明らかにするものなのです。人生の意味やすべての存在に対する親近感や普遍的なつながりは、宇宙的自覚から生まれてきます。宇宙的自覚を生み出す宇宙の様相は、シュヴェーター・シユヴァタラ・ウパニシャッドに次のように美しく描かれています。

それは火であり、太陽である。空気であり、月であり、実に純粋である。

それはブラフマンである。それは創造神ブラジヤパティである。

あなたは女であり、男である。あなたは少年であり、少女である。

あなたは杖をつく老人であり、また、生まれて

政治と宗教研究会より

宗教倫理と政治統合

アメリカ合衆国の場合

古矢 旬

一 はじめに——アメリカ生活における宗教

アメリカ合衆国における政治と宗教のかかわりについてお話しいたします。その場合、アメリカ人一般の日常生活にとって宗教がきわめて重要であることは、ほとんど自明なように思われます。最近の世論調査も、アメリカ社会と国民とが、現代の先進資本主義諸国のなかで例外的に「宗教的」であることを明らかにしています。たとえば、一九八〇年代の調査では、アメリカ人の十人中九人はなんらかの宗教への選好をもち、

八人は「宗教が自らの人生にとって大事な問題である」と答えています。さらに十人中四人は教会もしくはシナゴグへ毎週末定期的に行くことを習慣にしているといえます。それらの定期的な教会出席者の三分の一は、同性愛者はよきキリスト教徒もしくはユダヤ教徒にはなりえないと断じています。アメリカ人の「彼岸志向性」は、天使の存在を信じてと答えたティーン・エイジャーの率が七〇%近くに達するという数字にも示されています。これらの数字をみるならば、アメリカの家庭、学校、職場、街頭での社会生活において宗